5. 海生生物汚損対策懇談会

5.1 設 立

昭和 57 年（1982 年）12 月 2,3 の両日、大阪科学技術センターにおいて、化学工学協会関西支部の主催で“海水使用に伴う障害とその対策”セミナーが開かれた。アドバイザーとして参加した久松敬弘氏（東大工）は 100 名以上の参加者のこの問題への取り組みの熱心さに感心し、定期的な会合開催へのフォローアップについて西島、川辺両氏にその必要性を説いた。その後、久松氏の助言をもとに、当時“Marine Electrochemistry”¹⁾が注目されはじめた状況をふまえ、塩川二郎氏をはじめとする本会関西支部の役員諸氏の尽力によって、昭和 58 年に本研究懇談会が設立された。

海生生物障害に取り組むには化学、物理学、生物学の学際協力が必須の条件であり、本懇談会は学際協力を媒介する世話役を務めることを第一の役目とし、学際協力の成果を挙げることを第二の役目とした。設立当時の委員は山下（同志社大）、出来（神戸大）、坂口（電研）、西島（古河電工）、野世溪（住軽金）、堀田（NUS）の諸氏であり、主査は川辺允志氏（関電）であった。

5.2 活 動

年 2 回大阪で講演会を開くこととし、第 1 回は昭和 58 年 7 月 22 日に復水器系統生物汚損対策と題し、海外でのシンポジウムの報告をし、100 名以上の参加者があった。第 2 回以降は大型付着生物の生態、生活史、引き続いて微生物関係等のテーマがとりあげられた。

昭和 59 年からは原則として年 2 回セミナーやシンポジウム、講習会を開催し、東京にも進出し活動の拡大が図られた。また見学会や実習の会、勉強会、海外文献を読む会も実施している。講演会の速記に基づく資料等の作成や翻訳を行い、過去の活動のすべての資料は常備し、海生生物汚損の情報センターとして頒布もしている。

さらに、メーカーとユーザーが同じ土俵でデータを討議できるよう測定法の統一に取り組み、汚れ測定法²⁾と分極抵抗測定法をまとめた。後者は発展して JIS になる予定である。

また、海外での調査結果や国際会議の報告を行うとともに、国際会議で統一法の発表等も行い、国際交流を実施し、海外で入手した資料の翻訳等も行っている。

5.3 “海生生物汚損対策マニュアル”の作成と10周年記念大会

委員会では独自の研修を行い、常にレベルアップに努めているが、その活動の成果をマニュアルにまとめることにし、委員が分担執筆のうえ出版した³⁾。

10年を迎えるにあたり、過去の催しの講師を招待してパネル討論を実施すると共に、功労者に感謝状を贈呈し、お世話になった方々を招待してパーティーを開催し、10年の歩みや頒布可能な資料リストも記載した記念誌⁴⁾を刊行した。

本会の活動の詳細は、次の資料に記載されている。

電気化学, 51,853 (1983) ; 52,120,508,608 (1984) ; 54,410 (1986) ;

関西電力姫路第二発電所取水設備見学会
(昭和59年5月24日)

55,226 (1987) ; 57,1059 (1989) ; 59,404 (1991) ; 60,638 (1992) ; 本会
関西支部創立 50 周年記念誌, p. 288.

- 1) M. Whitfield, D. Jagner 編, John Wiley & Sons (1981).
- 2) 海生懇, 復水器引抜管汚れ測定方法, 電化, 58,713,829 (1988).
- 3) 技報堂出版 (1991).
- 4) 海生懇, 海生生物による障害と対策 (1992).

(川辺 允志)

6. PED 研究会

6.1 設 立

PED 研究会 (主査: 鋤柄光則 (東大生研)) は昭和 59 年 (1984 年) に設立され, 第 1 回の研究会での清水 勇氏 (東工大) と小林駿介氏 (東京農工大工) が, それぞれ ECD と LCD に関する話題提起を行った。それとは全く別に化学, 応用物理, 電子材料の分野からの研究者が自然発生的に集まり, どの組織にも属さない自由な雰囲気をもっとに “エレクトロクロミックディスプレイ研究会” が設立された。そして第 1 回の研究会が東工大長津田キャンパスで行われた。当時はエレクトロクロミックディスプレイでカラー表示も可能と思われ, 有機, 無機のような ECD 材料が話題に上り活発な討論が行われた。特に企業関係での参加者が多く, 富士通, 松下, 日立, 東芝, ソニー, キヤノン, 三洋, 日本電気, 旭硝子, 日本板硝子, 日本光学, 凸版印刷, 三菱電機と殆どの電気メーカーが参加していた。設立のいきさつから研究会とはいっても特に規則や会員登録があるわけではなく, 学会などでよく発表される研究者に毎回ダイレクトメールを送り, 次回の案内を行った。第 2 回は都立大学が幹事となり, 目黒の東京都迎賓館で研究会が行われ, 国際会議のような豪華な雰囲気であった。以後第 3 回は日本大学会館, 第 4 回は東京農工大学, 第 5 回は東北大学青葉記念会館, 第 6 回は東工大長津田と主に大学関係者が順番に幹事となって会場を